新米先生残留組とともに

松山　和子（昭和２年生まれ）

昭和 19 年 3 月「5 年生は 4 月から学校で勉強はしません。皆さんは蒲田駅前の新潟鉄工へ行って旋盤で飛行機の部品の生産に頑張ります。でも技術を身に付けたくて上の学校へ行きたい人は、国の特例法によって 4 年で卒業と認めます。」と訓示があった。

今まで必勝の鉢巻をして“花も蕾の若桜　五尺の生命ひっさげて　国の大事に殉ずるは　我等学徒の面目ぞ　ああ紅の血は燃ゆる”と学徒動員の歌を歌いながら、軍票作り、注射のアンプル洗い、風船爆弾の糊つけ等々勉強を休んで 2 週間ずつ工場へ動員された。

今度は違う、勝つまで工員として働くのだ。先生の「あなた先生になりたいのでしょ。一日でも早くお母さんを安心させなさい」の一言で臨教に行き、9 月から教生として母校に勤めることになった。8 月の集団疎開にも縁故疎開にも行けなかった児童（残留組）と勉強する。学年ひと組で、先生は年寄りか身体の悪い男の先生と女ばかりだった。その上養護の先生は小さな赤ちゃんを残して日赤の看護婦さんとして出征された。ご主人は出征中、おばあさんの背中の赤ちゃんの姿が今も目に浮かぶ。

それでも警戒警報、空襲警報の出ない時は戦争中も忘れて一生懸命勉強した。

お昼はパンの給食があり、コッペパン、ふかしパンなど暖かいのが配給になった。国も大切な少国民のための給食だったと思う。

20 年になると子どもも日に日に縁故疎開に行って少なくなり、クラス毎に配られる棚のパンがたくさん残り、そっと子どもに 2 個食べさせた。先生方が絶対に他人にやらないことが約束で分けてもらったこともある。

子どもたちは、友達が少なくても元気にゴロベースや鬼ごっこ、馬飛びをして遊び、警報が鳴ると決められた避難場所に入った。

宿直も女の先生が 2 人で泊まり、毎夜鉄兜を被って靴を履いたまま寝た。夜中でも警戒警報が鳴ると学校の屋根の上にある監視所に 1 人が上がることになっていた。暗い夜梯子を上って行くのも怖かったけれど、一番怖かったのは昼間艦載機の来ることだった。監視所にいると艦載機が降りてきて機銃掃射をする。私は監視所の壁に張り付いていると、アメリカの飛行機の星のマークまではっきり見え、搭乗員まで見えそうだった。必ず狙って機銃掃射するので、ピピピという撃つ音がしなくなると「助かった、生きている」とやおら立ち上がった。

空襲警報が解除になってから校門の外を見たら、今荷車を引いて来た馬に弾が当たって、ものすごく膨らんで死んでいた。引いて来たおじさんは、防空壕に入って無事だった。

学校の近くの家も空港の滑走路になるからと、家に綱をつけてみんなで引っ張って壊すのだ。B29 が来ても空の上の方を飛ぶので安心してみんな仕事を続けていた。

集団疎開の子どもたちには、国からいろいろな食料品が配給され、本校へ送られてくる。それを静岡の沼津2 学寮、磐田の 2 学寮、富山の 2 学寮に分けて送る。肉の缶詰、果物の缶詰、魚の

缶詰、砂糖、醤油、味噌、小麦粉、片栗粉、油などの調味料などがあって驚いた。

何時の時代も同じで、人の手を通るたびに少なくなり、最後の子どもたちに届く時は半分位になる。若い私には許されないことだった。残留組の子ども達は縁故疎開する先もなく、怖くても我慢して勉強していたのだ。

「父母のこえ」という疎開の歌をみんなでよく歌った。

3 月に入ってから、静岡など太平洋に面しているところは、艦砲射撃があるからと静岡から山形へ、富山はもっと奥深いところへ秘密の内に再疎開をすることになった。情報が入って品川の駅を通るので、お母さんたちが子どもの顔を見たくて行ったのに、窓の鎧戸を開けさせないので大声で探して歩いたけれど、とうとう逢えなかったとの話だった。

東京でも、下町方面で大空襲があったとかで再疎開と共に残留組から新 3 年生から 5 年生まで募集をして、第 2 次集団疎開組が結成され、3 月 27 日夜出発ということになった。

4 月 1 日から本当の先生として勤めることになった私は残留組と決まった。ところが出発の前日、校長先生に呼び出され「家庭の事情で付いて行かれなくなった先生に代わって疎開に付き添っていくように」とのことだ。その夜、行李ひとつに着替え日用品を詰め、布団を 3 枚別に早朝学校へ母から荷車で運んでもらった。私は後ろを押すだけだった。

行くことに決まった晩、祖母と 3 人で夕食をしながら「一人っ子で甘えていたけれど、貴女は先生として行くのだから自分の立場を考えて行動しなさい」と心構えを話された。

まさか二週間後、母と祖母との一生の別れになろうとは夢にも考えなかった。

富山へ集団疎開

昭和 20 年 3 月 27 日 17 歳 9 か月の新任の私は第 2 次集団疎開児童の付添教員として「頑張ってね、元気でね」のみんなの声に送られて学校を出発。集団疎開列車は秘密の出発だそうで、深夜静かに東京を離れた。

車中では修学旅行のように大喜びの子ども達を寝かせるのに大変だった「窓は絶対に開けてはいけない」との指令で、富山ってどんなところか心配しながら席についていた。

三日市で降りるとわかり、皆不安と希望で駅に降りた。先に疎開していた 6 年生が迎えに来てくれた。周りに雪があって皆びっくり。今まで学寮になっていたお寺に男女分かれて泊めてもらった。子どもが寝てから職員会議、今年度はもっと奥の村のお寺が私達の学寮ということだった。3 村に分けられた教員は 2 人ずつ、子どもも 3 つに分けられた。

駅に近いお寺は学寮長の場所、一番奥の村は私を含め若い女 2 人、次の朝、3 村の校長先生が迎えに来られ、一番奥の村には 2 か寺に分かれるとの事が分かった。校長先生について行ったが、高い雪の壁の中の道で、ズックがビショビショになって、冷たくて子どもは涙を出しながら歩いた。私はこれから一人でどうするのと不安で足も出ない。2 時間近く歩いてやっとお寺に着いた。すぐ隣が隣の学寮のお寺だった。半人前の先生なのに、32 人の子どもと一緒に暮らすことになった。寮母さん、作業員さんは村の方だった。寺の方、近所の方に協力してもらって子どもの荷物

を庫裏の周りに収納した。遊んだり集会などするときは本堂。寝るときはお庫裏の広間。勉強するときや食事は違う部屋を使わせてもらった。

毎日の勉強は村の学校へ皆で通い、クラスに入れてもらった。お友達もたくさん出来て、学寮にも遊びに来てくれた。弁当を作ってもらって村の子どもと一緒にさせてもらった。

食事は米が半分、大豆が半分で、混ぜて炊くとお腹をこわすので、別々に盛ってゆっくり食べることにした。野菜は村の方達の差入れが主だった。ドテッピョ、スベリヒユなど初めて食べた。塩が少なくて夏には１升瓶を１本ずつ抱えて、１時間もかかって入善の海まで行った。海で泳いで帰りに海水を持ってくる。海水で、いただいた馬鈴薯を煮て食べた。

それでもお腹をすかせて農家の方が馬鈴薯を植えているのを学校へ行く時見ていたので畑からとってきて、御堂の大火鉢の中で焼いて食べてしまったこともあった。干し柿や魚の干物を取ってきて分けて食べてしまい、その度に子どもを連れて謝りに行った。それなのに、帰りにまた戴いて来てしまうこともあった。村の方からは、心から良くしていただいた。

東京から親が面会に来ることがあり、始めのうちは自分の子どもだけに食べ物を持ってきて、「隠れて食べなさい」と教えて行く。次の日その子はお腹をこわす。その事を知らせたら段々と「みんなで食べてください」と置いていって下さるようになった。

村の祭りには、一軒一軒に招待されて、押し寿司やいろいろな郷土料理をご馳走になり、その後もお手伝いや子守や遊びに行かせてもらっていた子もいた。（今も続いている）

お寺に住まわしていただいた 6 か月、寺の方をはじめ、村の人の暖かさを身体一杯に受けた子どもたちには、素晴らしい体験だったと今も集まると必ず話が出ている。

教員であった私たちにも、村の校長先生の計らいで「24 時間勤務では大変でしょう、学校に来ているときには私たちが見てあげるから休みなさい」と教務室で自分の事務をしたり、教室で授業させてもらったり、村の先生の同僚として有意義な時間を過ごさせてもらった。

8 月 15 日終戦、寺はお盆のお参りで大変だった。皆が腑抜けのような中、子ども達は「僕たちが仇打ちをする」と言っていたが、東京へ帰れる日が 9 月 27 日と決まると大喜びをしていた。家が焼けて帰るところのないものは学寮を１つ残して、そこへ集まることになった。全学寮で約 30 村の先生がたが、最後に私達教員を招待して下さり、宇奈月に１泊旅行をしてお別れした。

私は帰る家も家族も無く、次の学寮に 3 月 20 日までいた。初めての経験の雪も富山のお正月まで経験させてもらった。

集団疎開というと、嫌だったことが伝えられているが、あの子どもたちが「あの経験は絶対に忘れられない」「あのお寺のお姉さんのような人になりたい」と何回も尋ねていることで、こんな良いところもありましたと伝えたいと思い書くことにした。

4 月 15 日の空襲で私の家族のすべて、家、故郷を一瞬に失った時、救ってくれたのは、子どもたちの澄んだ瞳だった。なぜかパンパンにでもなって、日本を離れたいと思った。

（祖母、母さんは何のために死んだのか、どうしても許されなかった）